

国史跡指定記念



午
王
山
遺
跡
展

ご
ぼ
う
や
ま

い
せ
ま
き
て
ん

独立丘に営まれた
弥生時代の環濠集落

令和5年 10/5 (木) ~ 10/29 (日)

時間 9:30 ~ 17:00



和光市民文化センター サンアゼリア 展示ホール
埼玉県和光市広沢 1-5

和光市教育委員会



開催にあたって

和光市は、埼玉県の最南端東寄りに位置しています。東京都に隣接し、交通の利便性がよいことで知られ、人口は年々増加し、宅地造成や開発も続いています。その一方で、湧水や緑地などが残るほか、歴史的文化資源等も保存されており、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）も43か所あります。

その遺跡の一つである午玉山遺跡は和光市の北側の独立した丘にあり、これまでの16回の発掘調査によって、弥生時代中期から後期にかけて集落が営まれていたことがわかっています。特に弥生時代後期中葉の頃は関東地方では類例の少ない多環濠集落であることがわかり、出土した土器や住居跡の状況から荒川中流域において南北間等の地域間交流の接点として機能したことがうかがえ、関東における弥生文化の交流の実態を知る上で重要な集落遺跡とされています。こうした学術上の価値が認められ、午玉山遺跡は令和2年3月10日に国の史跡に指定されました。

この度、この午玉山遺跡を多くの方々を知っていただくことを目指し、『国史跡指定記念 午玉山遺跡展～独立丘に営まれた弥生時代の環濠集落～』を開催することとなりました。市民の皆様におかれましては、本展示会を通して、午玉山遺跡の価値を知っていただき、今後の保存・活用、整備等にご理解とご協力をいただければ幸いです。

最後になりますが、本展示会を開催するにあたり、ご支援・ご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

令和5年10月 和光市教育委員会教育長 石川 毅

例 言

- 1 本冊子は「国史跡指定記念 午玉山遺跡展～独立丘に営まれた弥生時代の環濠集落～」の展示解説パンフレットです。
- 2 本展示会は和光市教育委員会が主催し、(公財)和光市文化振興公社と共催するものです。
- 3 本展示会及び記念講演会・関連講座は、「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業補助金」の交付を受けて実施するものです。
- 4 展示構成、展示内容と本パンフレットの内容は同一ではありません。
- 5 展示会場と展示期間は次のとおりです。
 - ◇展示会場：和光市民文化センター（サンアゼリア）展示ホール
 - ◇展示期間：令和5年10月5日（木）～10月29日（日）
- 6 展示期間中に記念講演会と関連講座を次のとおり開催します。

【記念講演会】

◇開催場所：和光市民文化センター 小ホール

◇開催日時：10月7日（土）

◇講演

「国史跡 午玉山遺跡の時代」

講師：石川日出志（明治大学文学部教授）

「午玉山遺跡の弥生土器を読みとく」

講師：林沼幹夫（一財）さいたま市遺跡調査会理事長）

「環濠集落午玉山遺跡」

講師：小倉淳一（法政大学文学部教授）

◇演奏

「いにしへの光と祈りの音楽 ～銅鐸と尺八～」

演奏者：元永拓、滝野瀬あゆか

【関連講座】

◇開催場所：和光市民文化センター 会議室A・B

◇開催日時：10月22日（日）

「午玉山遺跡と弥生時代の祭祀について」

講師：鈴木敏弘（和光市文化財保護委員会副委員長）

「午玉山遺跡の祭祀遺物について」

講師：遠藤英子（明治大学黒塚石研究センター客員研究員）

7 本パンフレット（P1～P19）に掲載している写真のうち、特に写真提供機関を記していないものは当該職員が撮影したものです。

8 本パンフレットには記念講演会・関連講座の要旨として關つたご講演者各位による玉編を掲載いたしました。

9 本展示の企画・構成は鈴木一郎（和光市教育委員会）が担当しました。また、記念講演会・関連講座の要旨以外の執筆は生涯学習課文化財保護担当が行いました。

<展示協力>

本展示に当たり多くの方にご協力いただきました。お名前を記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
文化庁、埼玉県教育委員会、埼玉県立さいたま史跡の博物館、(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業部、和光市教育委員会、志木市教育委員会、東松山市教育委員会、新座市教育委員会、(一財)さいたま市遺跡調査会、さいたま市立春日区博物館、さいたま市教育委員会、越前市教育委員会、西東京市教育委員会、早稲田大学考古学研究所、法政大学、明治大学、(株)東京航業研究所、青野歴史、赤澤由志子、渡野野介、石川日出志、磯 博史、井上知一、江原 誠、遠藤英子、近江 哲、小倉淳一、入江保樹、尾形明雄、尾崎少誠、小野弘光、桐野祥久、加藤秀之、川端幸人、隈本健介、齋藤由希子、高橋 純、齊藤麻史、齊藤悠哉、伊藤紀美子、佐藤雄二、加藤幸志、原沢 浩、鈴木敏弘、田村 聡、栗田幸典、高橋 一夫、藤田青木由、知久知明、藤田敏広、藤原昭紀、オリーブアマンド丸島、藤沼田由利、船本 悠、藤井秀成、保岡 裕、前田秀典、船本 亮、三村由典、水川由紀子、宮澤文二、宮原佳介、久川真規、安田勝一、山田真哉、船田理治

目 次

1 午玉山遺跡の特徴と重要性	1
2 午玉山遺跡の地形・立地	3
3 午玉山遺跡と地域間の交流	5
4 午玉山遺跡の弥生時代集落	10
5 和光市内の環濠集落遺跡	15
コラム 弥生時代の祈り・装身具	17
コラム 弥生時代の穀物栽培	18
6 午玉山遺跡の保存と活用	19

講演要旨・資料

・石川日出志「国史跡 午玉山遺跡の時代」	20
・林沼幹夫「午玉山遺跡の弥生土器を読みとく」	26
・小倉淳一「環濠集落午玉山遺跡」	32
・鈴木敏弘「午玉山遺跡と弥生時代の祭祀について」	38
・遠藤英子「午玉山遺跡のイネ・アワ・キビ 一和光市周辺での農耕のはじまり～」	40

午王山遺跡は埼玉県和光市新倉三丁目に所在する遺跡です。武蔵野台地の北東部にあたる荒川右岸の独立丘上に立地し、遠目から見ると周囲から隔てられた島のように見えています。午王山遺跡の規模は東西約250m、南北では東側が約170m、西側が約50mで、その面積は約20,000㎡に及びます。

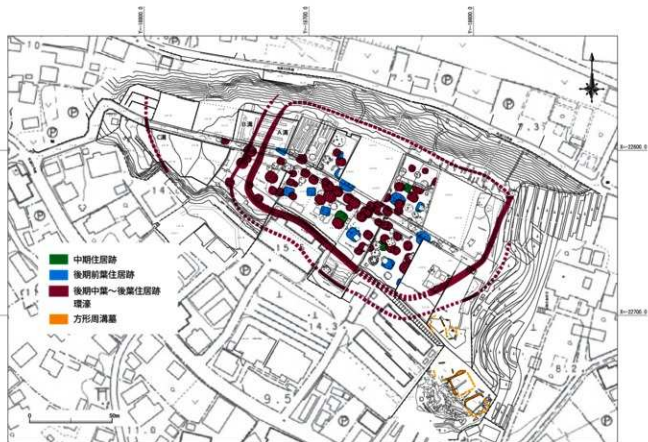
独立丘の上には平地があり、そこには様々な人々が生活していました。発掘調査の成果によって、特に弥生時代後期には関東でも有数の環濠集落が展開していたことが明らかとなっています。

和光市は午王山遺跡の重要性を踏まえ、午王山遺跡を後世にのこすため、平成22(2010)年に遺跡の一部(約306㎡)を公有地化し、平成25(2013)年にはその場所を和光市指定文化財(史跡)に指定し、保

存を図ってきました。また、午王山遺跡から出土した遺物の一部は平成30(2018)年に埼玉県指定文化財(考古資料)に指定されるなど、午王山遺跡の重要性が改めて評価されることになりました。

こうした状況を踏まえ、和光市は学識経験者による午王山遺跡総括報告書策定委員会を設置し、午王山遺跡の調査成果を『午王山遺跡総括報告書』としてまとめ、その価値を明らかにしました。

そして、令和元(2019)年7月26日付けで午王山遺跡を国の史跡に指定することについて文部科学大臣に意見具申し、国の文化審議会からの答申を経て、令和2(2020)年3月10日に午王山遺跡は国の史跡として指定されました。



午王山遺跡遺構配置図

●午王山遺跡の特徴と重要性

午王山遺跡では昭和54(1979)年から令和4(2022)年にわたり16回の発掘調査が行われました。調査の結果、午王山遺跡は弥生時代に集落が展開していたことがわかり、特に関東では類例の少ない弥生時代後期の多重環濠集落であることがわかりました。

弥生時代の午王山遺跡の特徴としては以下の点を挙げることができます(『午王山遺跡総括報告書』)。

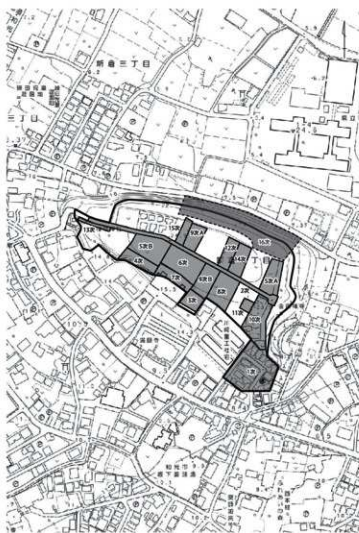
- ①荒川(旧入間川)低地に臨む独立丘に立地する、主に弥生時代後期の集落遺跡であり、中央平坦部の居住域と東縁辺部の墓域からなる集落の全容が把握できること。
- ②弥生時代中期後半から後期後半までの集落で、後期中葉前後に位置づけられる環濠を持つことから、集落の変遷と環濠との関係がつかめること。

③集落を囲むように3条の溝が設けられており、関東地方では類例の少ない多重環濠を持つ集落である可能性が高いこと。

④弥生時代後期の土器には、南関東系の久ヶ原式、中部高地系の岩鼻式、東海東部系の菊川式の3系統がみられ、遠隔地との交流や往来が確認できること。

⑤竪穴住居跡の平面形態、柱穴、炉の特徴、銅鐸形土製品や銅鐮の出土など、遺構や土器以外の遺物からも遠隔地との交流がつかめること。

以上のことから、午王山遺跡は弥生時代後期の関東地方を代表する集落遺跡のひとつであるとともに、荒川流域を中心として関東地方の弥生社会を解明する鍵となり得る遺跡と考えられます。また、弥生時代後期における広域にわたる交流と地域間関係の再編過程が把握できる遺跡ということが出来ます。



午王山遺跡発掘調査位置図

午王山遺跡 発掘調査一覧

年度	調査次	調査期間	地番	調査面積	担当者
1978~1979 (昭和53~54)	第1次	1978.3.20~4.16	新倉3丁目2867-1 外	#01,200㎡	鈴木敏弘
1981 (昭和56)	第2次	1981.8.10~11.30	新倉3丁目2836-1 外	#1,500㎡	鈴木敏弘
1992 (平成4)	第3次	1993.3.1~3.26	新倉3丁目2861-1	#272㎡	鈴木一太郎
1993 (平成5)	第4次	1993.8.30~9.22	新倉3丁目2844-1	#510㎡	鈴木一太郎
1994 (平成6)	第5次A区	1994.6.30~9.2	新倉3丁目2836-1	#900㎡	鈴木一太郎
1994 (平成6)	第5次B区	1994.6.30~9.2	新倉3丁目2842-1,2843-1	#594㎡	鈴木一太郎
1995~1996 (平成7~8)	第6次	1996.2.13~4.30	新倉3丁目2841-1,2842-1	#1,139㎡	鈴木一太郎
1997 (平成9)	第7次	1998.3.17~3.23	新倉3丁目2847-1,2861-2	#105.6㎡	鈴木一太郎
2000 (平成12)	第8次	2000.4.3~7.18	新倉3丁目2839-1	#787㎡	鈴木一太郎 前田秀則
2000~2001 (平成12~13)	第9次A区	2001.2.13~4.10	新倉3丁目2832-1	#368㎡	鈴木一太郎 前田秀則
2000~2001 (平成12~13)	第9次B区	2001.2.26~4.29	新倉3丁目2840-1	#479㎡	鈴木一太郎 前田秀則
2004 (平成16)	第10次	2004.11.1~11.26	新倉3丁目2837-1	#967㎡	鈴木一太郎 前田秀則
2004 (平成16)	第11次	2004.11.16~12.24	新倉3丁目2838-1	#178㎡	鈴木一太郎 前田秀則
2004~2005 (平成16~17)	第12次	2005.1.28~5.9	新倉3丁目2834-1	#900㎡	鈴木一太郎 前田秀則
2006 (平成18)	第13次	2006.8.16~8.24	新倉3丁目2825-3	#51㎡	鈴木一太郎
2006~2007 (平成18~19)	第14次	2007.5.5~5.11	新倉3丁目2834-1	#968㎡	鈴木一太郎 前田秀則
2011 (平成23)	第15次	2011.4.28~4.28	新倉3丁目2831-1	#1306㎡	鈴木一太郎
2022 (令和4)	第16次	2022.8.2~9.22	新倉3丁目2811-1,2812-1	#108㎡	山本 龍 鈴木一太郎

2 午王山遺跡の地形・立地

●午王山遺跡の地形と立地

和光市の地形は大きく分けて「台地（武蔵野台地）」と「低地（荒川低地）」に分けることができ、その内訳は和光市域ではおおむね台地が70%、低地が30%程度となっています。

午王山遺跡はこの武蔵野台地の北端部に位置しています。しかし、南側に大きく展開する台地と地続きではなく、午王山遺跡の南側は侵食する谷によって切り離されており、周囲から独立した一つの丘のような地形となっています。こうした独立丘の上に弥生時代の一時期、集落が継続して展開していたことが午王山遺跡を特徴づける大きな要因の一つです。

午王山遺跡は発掘調査の成果によって、この独立丘の平坦部全面に集落が展開していたことが明らかとなっています。特に、弥生時代後期の一時期には独立丘の平坦部の周囲が環濠と呼ばれる溝で囲われていた

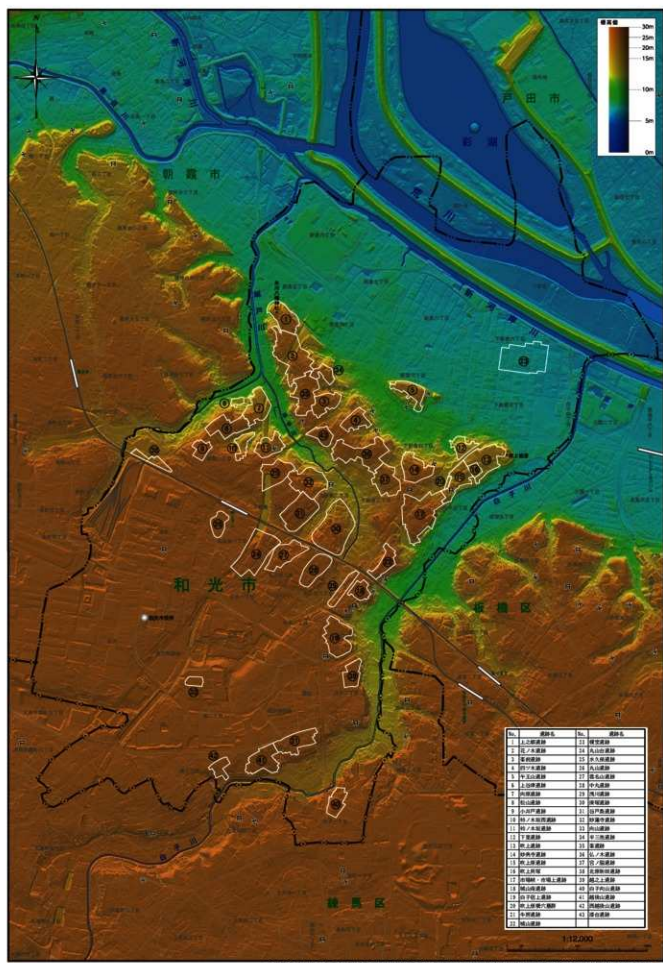
ことがわかりました。その内側には居住域、その外側には墓域が展開することから、山全体を集落の一単位としていたことがうかがえます。



午王山遺跡空中写真（昭和55年撮影）



午王山遺跡位置図（国土地理院 地理院WEBを基に作成）



和光市域の地形と遺跡分布

(4) 午王山遺跡展

3 午王山遺跡と地域間の交流

午王山遺跡から出土した弥生時代後期の土器には、東京湾岸系の久ヶ原式土器、信州系の岩鼻式土器、東海東部系の下戸塚式土器という異なる系統の特徴を把握することができます。午王山遺跡は南関東に広がる東京湾岸系の久ヶ原式土器が分布する地域でありながら、信州地方の北からのルートと東海地方の南からのルートの結節点に位置していたことが確認でき、遠隔地との交流や往来があったことがわかります。

また、土器だけではなく、竪穴住居跡の平面形態・柱穴・炉など遺構の特徴や、銅鐸形土製品や銅剣などの遺物の特徴からも遠隔地との交流がつかめます。特

に銅鐸形土製品は3点出土しており、いずれも東海地方西部の三遠式銅鐸を模倣していることが考えられています。

こうしたことから、午王山遺跡は関東地方において南北の交流の拠点的な集落であったと考えられます。



いわほいせき
●岩鼻遺跡

岩鼻遺跡は東松山市大字松山字岩花に位置し、岩鼻台地と呼称される狭長な台地上にあり、標高 34 m に立地します。縄文時代中期から古墳時代前期の集落跡と古墳時代後期の古墳群が存在した複合遺跡です。

昭和 40 年頃の発掘調査により出土した櫛描文系土器群は、当時認識されていた北武蔵の弥生時代の土器群と異なった様相であったことから、岩鼻遺跡を標識遺跡とし、岩鼻式土器と呼ばれるようになりました。



櫛描縲状文

【櫛描縲状文】

櫛状の施文具により、横方向に連続した押し引きを行い、スダレのような文様が連続して連なった形の文様です。整文される場所は土器の頸部を巡っています。縲状文の下段には、同じ施文具により波状文が横方向に描かれることがよくみられます。



岩鼻式土器〔岩鼻遺跡〕
(所蔵：東松山市教育委員会)



岩鼻遺跡 (写真提供：東松山市教育委員会)

しもとつかいせき ●下戸塚遺跡

下戸塚遺跡は東京都新宿区西早稲田1丁目の早稲田大学安部球場跡地で発見されました。武蔵野台地の東部、神田川右岸の標高13～15mの低位段丘面に立地します。

旧石器時代から近現代に至る複合遺跡であり、中でも弥生時代の集落は環濠、竪穴住居などの遺構が検出され、規模や展開から大規模な環濠集落であったことが確認されています。集落の継続期間は弥生時代後期全般ですが、後期前・中葉以降では、東海地方の影響を受けたハケ刺突文の土器が多く出土しています。



壺形土器【下戸塚遺跡】

(所蔵：早稲田大学考古資料館)



ハケ刺突文

【ハケ刺突文】

薄手の木板状の道具を刺突してできた文様です。刺突を横に繰り返して洗線区画を形成するほか、区画内に斜めに連続刺突を繰り返して、斜織文あるいは羽状織文を模したのものもあります。



下戸塚遺跡 (写真提供：早稲田大学考古資料館)

だいらしょうじいせき ●代正寺遺跡

代正寺遺跡は埼玉県東松山市大字宮鼻字代正寺にあり、高坂台地の中央よりやや東側に位置しています。北側は和田吉野川、南側は越辺川に面し、東側は荒川の沖積地へのぞみます。標高は約26～30m、低地との比高は8～12mあります。この遺跡が所在する



代正寺遺跡 (写真提供：埼玉県教育委員会)

台地上は平坦部が広く、集落を形成するのに適した条件を備えています。

縄文時代から中近世に至る遺物や遺構が確認され、特に弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての住居跡や方形周溝墓などが多数検出されており、この時期に集落が活発に営まれていたことがうかがえます。



壺形土器【代正寺遺跡】

(所蔵：埼玉県教育委員会)

むかいやまいせき
●向山遺跡

向山遺跡は、朝霞市岡地内に位置し、荒川右岸の標高 20 m ほどの武蔵野台地上に立地しています。遺跡を隔する小支谷からの比高は 7 m ほどです。遺跡は、旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡です。この遺跡で特筆されるのは、弥生時代中期の住居跡から大陸系磨製石器群や鑄造袋状鉄斧が検出されたことです。また、遺跡の北側は開発によって削平されており詳細は不明ながら弥生時代後期の住居跡からは東海地方の影響を受けたハケ刺突文土器がいくつかみられます。その他に銅鐸形土製品が出土しています。この銅鐸形土製品は、銅身と肩部の境を示すようにハケ刺突による沈線が施され、全体はハケ目調整ののちミガキが行われ、東海系の壺と同様の調整が施されています。遺跡は東側の朝霞第二小学校の校庭内やその周囲からも住居跡が確認されていることから総数数百件にもなる近傍の最大級の拠点集落であったものと推定されます。また、中期の方形周溝墓からは、北関東に分布する北島式土器が出土しており、土器の移動が証明されています。

谷を挟んで近接する中道・岡台遺跡からは弥生時代後期の環濠が検出されています。



銅鐸形土製品〔向山遺跡〕
(所蔵・写真提供：朝霞市教育委員会)

にししくぼ みややまいせき
●西久保・宮山遺跡

西久保・宮山遺跡は、朝霞市浜崎地内に位置し、黒目川右岸の武蔵野台地に構成された標高 10m ほどの河岸段丘上の東向き斜面に立地します。遺跡は、旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡です。この遺跡は、黒目川左岸流域に点在する弥生時代後期の小規模な集落に該当すると考えられ、弥生時代の住居跡は武蔵野台地の末端部、荒川低地に面する地域に移行するほど増加します。

隣接する中道・中道下遺跡からは弥生時代の集落が、北原・谷津遺跡からは方形周溝墓群が検出されています。



向山遺跡 遺構配置図 (図面提供：朝霞市教育委員会)



ハケ刺突文のある壺形土器〔西久保・宮山遺跡〕
(所蔵：朝霞市教育委員会)

いなりやま こうど いせき
● 稲荷山・郷戸遺跡

稲荷山・郷戸遺跡は、朝霞市根岸台地内に位置し、越戸川左岸の標高 28 m ほどの武蔵野台地上に立地します。越戸川低地部からの比高は約 20 m を測ります。この遺跡で特筆されるのは、弥生時代後期前半の信州系柳描文の住居跡と後期の環濠が検出され、後期中葉以降には環濠が営まれていたことがわかることです。環濠は部分的に調査されたもので、全容は明らかではありませんが、その一部は越戸川に面する谷筋に向かい落ち込み、旧水場であろう斜面まで続いていたと思われる。環濠からの出土土器は、弥生時代後期中葉以降のもので小支谷により分断されていることから別遺跡とされる新屋敷遺跡出土の後期の遺物とは時間的に大差がなく、一連の遺跡と考えられます。

近接して宮ノ台式期の集落跡として知られる台の城山遺跡（現新屋敷遺跡）や朝霞市指定史跡『郷戸遺跡』（現新屋敷遺跡）が、越戸川を挟んだ和光市側には上之郷遺跡・花ノ木遺跡が対峙するなど弥生時代の集落跡が多く確認されています。



稲荷山・郷戸遺跡 上：空中写真 下：環濠
 (写真提供：朝霞市教育委員会)



岩鼻式土器 [稲荷山・郷戸遺跡] 右は柳描麻状文拡大写真
 (所蔵・写真提供：朝霞市教育委員会)



岩鼻式土器 [稲荷山・郷戸遺跡]
 (所蔵・写真提供：朝霞市教育委員会)

にしほらおつか いせき
● 西原大塚遺跡

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部の幸町 2～4 丁目に所在する遺跡です。北東から南西方向に約 700 m、北西から南東報告に約 150 m の広がりを持ち、志木市内で最大規模の遺跡として知られています。

西原大塚遺跡では、これまでに 200 回を超える調査が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが明らかとなっています。弥生時代後期から古墳時代前期にあたる住居跡は 630 軒以上、方形周溝墓は 30 基以上確認されています。

弥生時代後期にあたる遺構からは、東京湾岸系の土器に加え、東海系の壺形土器（第 43 地点 131 号住居跡）などが出土しています。また、方形周溝墓から出土した鳥形土製品は近隣には類例のない資料として注目されているほか、第 582 号住居跡からは弥生時代後期のものと捉えられる銅剣も出土しました。



西原大塚遺跡 (写真提供：志木市教育委員会)



ハケ刺突文のある土器 [西原大塚遺跡] 右写真はハケ刺突文拡大写真
 (所蔵：志木市教育委員会)



4 午王山遺跡の弥生時代集落

午王山遺跡では、はじめに弥生時代中期後葉（宮ノ台式期Ⅴ期、紀元前1世紀頃）から住居が確認されるようになります。しかし、この当時はまだ小規模な集落だったと思われます。午王山遺跡で本格的に集落が展開するようになるのは弥生時代後期からです。



第 82 号住居跡出土



第 1 号住居跡出土



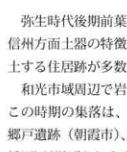
第 97 号住居跡出土



第 72 号住居跡出土



第 108 号住居跡出土



弥生時代後期前葉（1世紀頃）になると、信州方面土器の特徴を持つ岩鼻式土器が出土する住居跡が多数出現します。

和光市域周辺で岩鼻式土器を主体とするこの時期の集落は、午王山遺跡、稲荷山・郷戸遺跡（朝霞市）、氷川神社北方遺跡（板橋区）が挙げられます。これらの遺跡では、

岩鼻式土器に加えて東京湾岸系の久ヶ原Ⅰ式土器が共存している

様子うかがえます。この岩鼻式の土器を使用する人々は環濠を形成しない文化であったと考えられており、午王山遺跡の環濠もこの段階では構築されていなかったものと考えられます。



第 74 号住居跡出土



第 141 号住居跡出土

弥生時代後期中葉（2世紀頃）になると、岩鼻式土器を使用する人々は午王山遺跡やその周辺からは姿を消します。そうした人々と入れ替わるように午王山遺跡で新たに集落を形成するのは、東海地方東部（東遠江）の菊川式土器を系譜に持った下戸塚式土器を使用する人々です。弥生時代後期中葉頃の午王山遺跡では、ハケ刺突文が特徴的な下戸塚式土器が出土する住居跡が多数見つかっています。また、その時期に午王山遺跡全体を囲うように環濠が掘削され、環濠集落が形成されたと考えられます。

その後、環濠を構築する必要がなくなったためか、午王山遺跡の環濠は機能を失い、埋没します。環濠が埋没した後も集落が存在したことは、埋没した環濠の上に構築された住居の存在からも確認することができます。その頃の集落は数軒の住居のみが営まれる状態でした。午王山遺跡で確認できる弥生時代の住居跡はこの時期までとなります。

こうして弥生時代中期頃に小さな集落として開始した午王山遺跡は弥生時代後期中葉頃に終焉を迎えました。



第10号住居跡出土



第63号住居跡出土



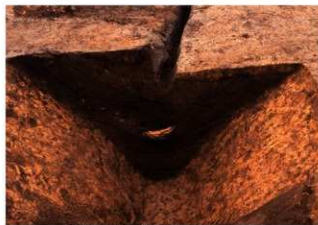
第75号住居跡出土



午王山遺跡第8次調査



午王山遺跡調査風景（第2次調査）



埋没した環濠の上に住居が構築されている
（第4次調査）

●住居の形態の特徴

発掘調査によって午王山遺跡では150数軒に及ぶ弥生時代の住居跡が確認されています。これらの住居跡はその平面形から大きく2種類に分けることができます。一つは、信州系の岩鼻式土器が出土する「隅丸方形」、もう一つは、東海東部系の下戸塚式土器が出土する「楕円形または小判形」です。また、住居の中につくられた「炉」を見ると、下戸塚式土器が出土する住居跡の炉は火皿式炉（粘土板炉）と呼ばれる東海地方の特徴をもっていることがわかります。



隅丸方形の住居と楕円形の住居跡（午王山遺跡第6次調査）

●関東では類例の少ない多重環濠

環濠とは、縄張りを示したり外部からの侵入を防ぐために築かれた溝のことです。

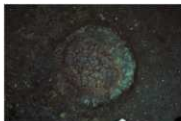
午王山遺跡では3条の溝が確認されています。内側から順にA溝・B溝・C溝で、いずれも断面形状は「V」字状であることが確認されています。

A溝とB溝は、集落を囲うように内側と外側にほぼ一定の間隔を保って並行して掘削されています。A・B溝の推定の長さは約775m、約790m、最大幅は

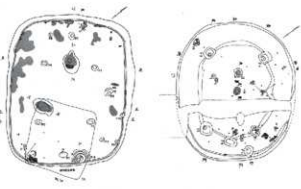


午王山遺跡の環濠（第7次調査 A溝）

午王山遺跡は南関東に広がる東京湾岸系の久ヶ原式土器が分布する地域でありながら、信州系や東海東部系という異なる系統の出土遺物が確認されており、様々な地域との交流や往来の結節点のような場だったのでしょうか。



火皿式炉（午王山遺跡第9次調査）



隅丸方形と楕円形の住居跡

約3.2m、約1.8m、深さは約1.7m、約0.95mで、配置関係から同時期に機能していた二重環濠であった可能性が高いものと考えられています。

西側の緩傾斜部に設けられたC溝は、外部からの侵入を断ち切るように設けられており、環濠のように輪にならないものと思われることから「条濠」と呼ばれています。

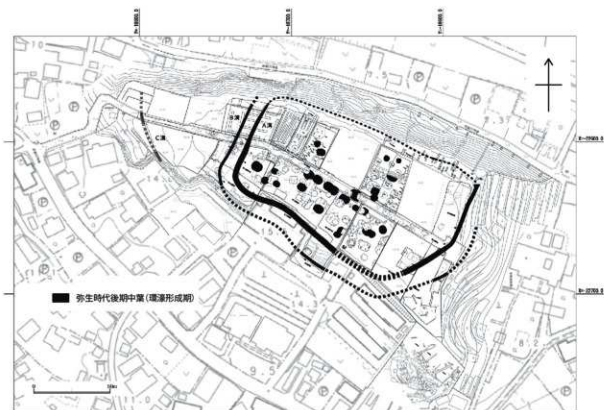
こうした多重の環濠で囲われた集落遺跡は関東地方では類例が少ないため、午王山遺跡が持つ大きな特徴の一つといえます。



確認された多重環濠（第4次調査）



午王山遺跡の環濠から出土した弥生時代後期中葉の土器



弥生時代後期中葉の午王山遺跡 (環濠集落形成期)



午王山遺跡第2次調査空撮（昭和56年）



C溝（第13次調査）



B溝（第3次調査）



A溝（第5次調査B区）



B溝（第10次調査）

5 和光市内の環濠集落遺跡

和光市内の荒川低地をのぞむ武蔵野台地の縁辺部には、午王山遺跡以外にも弥生時代の環濠集落が見られます。午王山遺跡の東南には吹上遺跡、午王山遺跡の西側には半三池遺跡、花ノ木遺跡があり、午王山からはそれらの遺跡を見通すことができます。

● 花ノ木遺跡

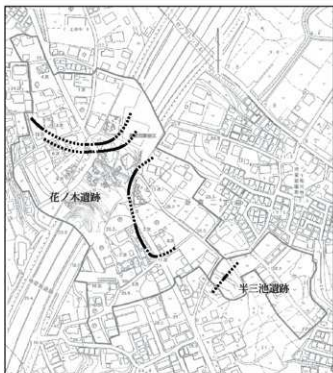
花ノ木遺跡は和光市新倉2丁目の、武蔵野台地縁辺に位置し、遺跡の西側を流れる越戸川とその支流の谷中川により形成された舌状に延びる台地に立地しています。標高は24～28m、低地との比高は約20mです。

この遺跡は、東京外かく環状道路建設に伴う埼玉県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査和光市主体の発掘調査が行われています。これまでの調査結果から旧石器時代から近世に至る複合遺跡であることが判明しており、中でも主体となるのが弥生時代と平安時代です。

弥生時代の遺構は、中期後半の住居跡3軒のほか後期の住居跡が10数軒、方形周溝墓が8基、環濠が3条検出されています。環濠は2条連なる環濠と、方形周溝墓群と地形のくびれを境に別方向に展開する環濠となっており、少なくとも環濠集落が2つあったことが確認されています。



壺形土器 [花ノ木遺跡]
(所蔵：埼玉県教育委員会)



和光市花ノ木遺跡/半三池遺跡



確認された環濠 (花ノ木遺跡第15次調査)



確認された環濠 (花ノ木遺跡第15次調査)

●はんざいけいせき 半三池遺跡

半三池遺跡は、和光市新倉2丁目の舌状に延びる台地上に立地し、同じ台地上で花ノ木遺跡、峯遺跡と隣接しています。標高約26mであり、南東向きの緩い谷の上に位置しています。平成25(2013)年11月の第1次調査では、断面が「V」字状の弥生時代の環濠が4mほど検出され、試掘のトレンチでも北東へ伸びていることが確認されています。令和元(2019)年9月には市道の擁壁工事中に断面「V」字状の溝がさらに約46mまで延長していることが確認されました。上部が削平されていることに加え、出土遺物がほとんどなく詳細な時期は不明ですが、弥生時代の環濠であると考えられます。

隣接する花ノ木遺跡では地形のくびれを境に2つの環濠集落が形成され、この半三池遺跡でも環濠が検出されていることから、この辺りは環濠集落が密集している地域であることがわかります。



確認された環濠（半三池遺跡）



確認された環濠（半三池遺跡）



検出された環濠（吹上遺跡）



住居跡（吹上遺跡）

●ふきあげいせき 吹上遺跡

吹上遺跡は、和光市白子3丁目4417～4421番地他に位置する遺跡です。荒川と白子川に挟まれた北東方向に向かう舌状台地上にあり、標高は約18～22mです。

吹上遺跡は、旧石器時代から平安時代までの複合遺跡であることが明らかとなっており、中でも縄文時代中期の「吹上貝塚」としてその名を広く知られています。

弥生時代には、午王山遺跡や花ノ木遺跡と同様の環濠集落であったことがわかっています。出土した住居跡と環濠からは、午王山遺跡と同様のハケ刺突文が施される東海東部（東遠江）の菊川式系の下戸塚式土器が確認されています。その他、第3次調査区第26号住居跡から出土した青銅製環状品は当時の指輪であると考えられています。

コラム

弥生時代の祈り・装身具

午王山遺跡の特徴的な遺物としては、銅鐸形土製品、銅釧、土鈴、双角有孔土製品、土製勾玉、土製玉、土製垂飾品などが出土しています。

中でも銅鐸形土製品は、関西圏から東海にかけて出土する、青銅製の銅鐸の代わりとして、祭祀などに使われていたと推察されています。

【銅鐸形土製品】

弥生時代の銅鐸を模した小型の土製品です。午王山遺跡からは3点出土しました。いずれもA溝覆土の下戸塚式土器と同じ中層より出土しています。関東地方では出土例が少ないこの土製品が同一遺跡で同一遺構から複数出土することは大変珍しいことです。舞と呼ばれる頂部には、焼成前に貫通する穴があけられて、舌（銅鐸を鳴らす錘）を吊るす穴を表現しています。これらの銅鐸形土製品は東遠江からの影響が考えられます。

【銅釧】

和光市唯一の青銅製の腕輪です。A溝覆土の中層から破片で出土しました。周辺市区でも出土例が少ないため、弥生時代には貴重な装身具であったと思われます。

【土鈴】

土製の鈴です。A溝覆土の中層から割れて出土しました。内部は中空ですが球は不明です。頂部には紐通しの穴がありますが、音出し用の穴はありません。

【双角有孔土製品】

午王山遺跡から出土した下部写真の3点は、それぞれ別々の弥生時代後期の住居跡から出土しました。2個の耳の様な角があり、丸みを帯びたキツネ面の様な形で穴が複数空いています。大宮台地や武蔵野台地にある弥生時代の遺跡からわずかに出土しています。用途などは不明です。

【土製勾玉・土製玉・土製垂飾品】

素焼きの勾玉や玉・円形の垂飾品などです。焼成前穿孔され、紐通しの穴が開いています。



銅鐸形土製品（左から第3次・7次・5次A溝出土）



銅釧（第4次A溝出土）



土鈴（第5次A溝出土）



双角有孔土製品（左から第69号・141号・116号住居跡出土）



土製勾玉（左から第97号・100号・132号住居跡出土）



土製垂飾品（左から第5号・第77号住居跡出土）

コラム

弥生時代の穀物栽培

「弥生時代の特徴は何ですか？」と質問すると、多くの方が「稲作がはじまったこと」とイメージされるのではないのでしょうか。近年では縄文時代晩期の遺跡からも水田跡が確認されていますが、やはり稲作は弥生時代の大きな特徴の一つであるといえます。

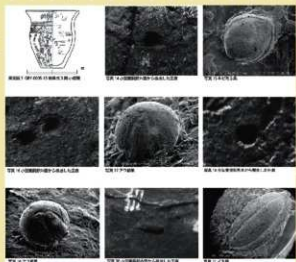
では、和光市の弥生時代の稲作はどのようなものだったのでしょうか。実は、弥生時代の水田跡は和光市域や周辺の地域からは見つかっておらず、その実態は未だ明らかになっていないことが多いのが現状です。

近年では、「レプリカ法」と呼ばれる調査により、土器に残された痕跡から当時の穀物を確認する方法が確立されています。このレプリカ法による調査の結果、午王山遺跡の出土土器からは、イネ、アワ、キビなどの穀物痕が確認されました（遠

藤英子 2019）。こうした調査の成果から、午王山遺跡においても穀物栽培が行われていたことが想定されます。

また、和光市白子三丁目に位置する市場峡・市場上遺跡の弥生時代後期の住居跡から多量のコメが出土しました。本来であればコメなどの植物は時間を経るうちに土に還ってしましますが、この住居は焼失住居（火事で焼けた住居）であったため、炭化することで現在にその姿を残しました。コメは土器の中から検出されたものであることから、当時調理中あるいは貯蔵していたものであったことが想像されます。

水田の遺構は確認されていないものの、このような発掘調査の成果によって、弥生時代の和光市域に住んでいた人々は穀物を栽培し、コメなどの穀物を食していたと考えられます。



午王山遺跡出土土器に対して行われたレプリカ調査の一例
（『午王山遺跡総括報告書』図版 21 より引用）

【参考文献】

鈴木一郎他 2013『市場峡・市場上遺跡（第 18 次・第 19 次調査）』
和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
遠藤英子 2019『第 1 節 レプリカ法による午王山遺跡の栽培穀物調査』
『午王山遺跡総括報告書』和光市教育委員会



炭化米出土状況
（市場峡・市場上遺跡）



市場峡・市場上遺跡から出土した炭化米
（『市場峡・市場上遺跡（第 18 次・第 19 次調査）』図版 3 より引用）

6 午王山遺跡の保存と活用

和光市では国史跡である午王山遺跡を保存・活用するため、令和4(2022)年3月に『国史跡 午王山遺跡 保存活用計画』を策定しました。この計画では午王山遺跡の本質的価値を「独立丘に営まれた集落」「関東では類例の少ない環濠集落」「遠隔地との交流」「竪穴住居跡の平面形態の変遷」の4点とし、今後はこれらを踏まえた保存・活用・整備を進めることとしています。

① 保存について

午王山遺跡は独立丘全面に弥生時代の集落があったことが本質的価値であり、保護を要する範囲は山全体の約26,000㎡になります。現在はこの数値を目標とし、史跡として指定し保護することを目指しています。しかし、その対象の範囲の北側は「土砂災害特別警戒区域」に指定されており、また南側も旧地形を掘削した崖面となっていることから、史跡の崩壊をさけるために、関係部局や関係機関と連携して盛土などの安全対策を実施する必要があります。

また、午王山遺跡の本質的価値を後世に伝えていくために、継続的な調査研究が必要です。

現在、和光市では有識者により構成された午王山遺跡調査指導委員会を組織し、発掘調査に関することや保存活用に関することについて、指導や助言をいただいています。

② 活用について

午王山遺跡は現状では未整備であり、市民の方の認知度も残念ながら高いとはいえない状況です。そのため、整備を進めることはもちろんですが、遺跡を様々な方法で活用していくことも重要です。

現在は、「生涯学習の場での活用」として、市民大学講座、子ども大学、公民館や図書館での講座、フィールドワーク等を実施しています。また、「周知の文化財と連携した活用と情報発信」として、『和光市デジタルミュージアム』での紹介や『午王山だより』の発行等、周知に努めており、これからも内容を充実して継続していく予定です。

また、今後の課題としては「学校教育の場との連携」が挙げられます。学校の求めに応じて子ども向けの遺跡見学会などを行っていますが、現地から遠い学校は訪問は難しい状況です。また、教員に対しても午王山遺跡を周知する機会が少なく、さらに史跡に指定されて間もないため、和光市の副読本にはまだ午王山遺跡の記載がありません。今後は、学校教育において、午王山遺跡を活用できるような環境を作り、子どもたちにも地元の史跡として理解してもらえるようにする必要があります。

③ 整備について

午王山遺跡の本質的価値を後世に伝えていくためには、独立丘全体の史跡整備が必要です。

整備の大前提は、「史跡保護」になります。その上で、独立丘上に立地する弥生時代の集落を体感できる史跡公園化を進めていくことが『国史跡 午王山遺跡保存活用計画』で示されています。

整備の方法、内容として「説明板等の設置」、「遺跡を取り巻く自然環境、景観の保全」、「ガイダンス施設の整備」、「便益施設等の整備」などが挙げられます。今後、整備を具体的に進めたいため、「整備基本計画」の策定が必要です。

和光市では今後、現在公有地化できている土地を中心に第1期整備を行うことを目指し、令和7年度頃から整備基本計画の策定を始める予定です。計画の策定にあたっては、有識者や市民の方などを含めた策定委員会を立ち上げて議論いただくほか、ワークショップを開催するなど、様々な視点からのご意見をいただきます。史跡午王山遺跡の今後の整備にご期待ください。



午王山遺跡調査指導委員会の様子

国史跡 午王山遺跡の時代

石川日出志 (明治大学文学部)

1. 集落群の中の午王山遺跡

和光市午王山遺跡は、武蔵野台地の北縁の一面をなす独立丘に立地する。1981年の調査で、中央を横断する市道部分が発掘され、丘上の平坦部全域に竪穴建物（住居）跡が密集、居住域を区画すると判明した。これまで15次にわたる調査で、弥生時代中期後葉に小規模な集落として始まり、後期になると丘上全域で住居が繰り返し構築され、後半まで存続した。後期中葉の一時期、二重の環濠（A・B溝）が居住域を取り囲み、緩い坂を少し下った西端部にも弧状の濠（C溝）が設けられる（図1）。弥生時代集落の全容とその推移がつかめ、それらがよく保存されることや、周辺諸地域との交流もわかることから、2020年に国史跡に指定された。

しかし、午王山遺跡はこの地域に単独で営まれたわけではない（図2）。午王山遺跡と同じく後期の環濠集落として、午王山遺跡の南側を取り巻く谷地形を挟んで東西1km弱の台地上に吹上遺跡（東）と花ノ木遺跡・半三池遺跡（西）がある。これだけでなく、和光市域の武蔵野台地北縁はびっしりと弥生時代後期の集落が並ぶ。図2では東京都の北区から板橋区東部域にかけての一带が代表例しかプロットされていないが、実際には上野界隈から埼玉県富士見市域までの弥生時代後期の集落が連続と連なり、その総延長は25kmにも及ぶ。その中でも特に和光市界隈の遺跡集中度が高いことに注目したい。

約7km北方の大宮台地南縁でも環濠集落を含む集落群があるし、両地区の間に広がる荒川（旧入間川）低地でも微高地上の各所に集落遺跡がある。戸田市鍛冶谷・新田口遺跡は低地に営まれた集落の代表例である。史跡指定されたのは午王山遺跡だけだが、これらの遺跡群の中に午王山ムラが

あったことを忘れてはならない。

大小の環濠集落や低地の集落が、それぞれ個性を発揮しつつ、連携し合う地域社会を構成していたのであろう。

2. 南関東の中の午王山遺跡界隈

関東地方における弥生時代中期後半と後期前半の土器型式の分布状況を図3に示した。関東地方は、個性的な土器型式が複雑に入り組んだり、錯綜したりすることが特徴である。中期後半（図3左）では東海系・中央高地系・東北系の3系統が関東に進出し、その中央北部に在来伝統が明瞭な型式が併存する。それが後期になると再編されて図3右のようになる。午王山遺跡（★印）は南関東系と中央高地系（岩鼻式）が重なる地域に当たった。しかし実態はさらに複雑で、東遠江の菊川式に由来する特徴や西駿河の登呂式土器もあり、複雑な様相を呈する。なにやら広域にわたる交流や、それに伴う地域関係の編成替えが起きているかのようである。

3. 同時代の西日本の動き

午王山遺跡の全盛期はおおよそ西暦紀元後1世紀から2世紀前半にあたる。その頃、西日本では何が起きていたのであろうか。まず挙げべきは、日本列島に住む倭人の中の最有力者が、強大な権力機構を作り上げていた漢王朝と直接外交交渉を行った点である。『後漢書』倭伝には、建武中元二年（AD 57年）に倭奴国が奉貢朝賀したのに対して、皇帝の光武帝が印綬を与えたこととある。江戸時代に志賀島で発見された「漢委奴国王」金印がこの印綬の「印」である。さらにその50年後の安帝永初元年（AD 107年）にも倭国王帥升等が外交交渉を行った。『魏志倭人伝』に見える

卑弥呼の景初3年（A D 239年）の外交に対する答礼品を参照すると、『後漢書』には全く記事がないものの、各種の織物や物品が答礼として大量に賜与されたはずである。

これら外交交渉で入手したとみるべき物品は北部九州だけでなく、東方にもたらされた。例えば、岐阜市瑞龍寺山遺跡で発見された四葉座内行花文鏡は後漢初期の製品で、遺跡で後期前半の土器と共存した。22.1cmという面径は大型鏡に属し、外交レベルでしか入手できない。

もう一つ注目したいのは近畿一帯における銅鐸の製造や流通に激変が起きている点である。大陸から入手した地金を用い、青銅器製造であるから専門工人である。後期初頭までは多数の工人集団が併存したのが、後期前葉には基本的に2つの型式（近畿式と三遠式）に集約されている。しかも、近畿の弥生文化を代表する祭器なのに、奈良盆地ですでに銅鐸祭祀から離脱している可能性がある。近畿周辺でも地域間関係の再編が進行していたとみる。そうした余波が関東にも及んだと私は考える。

4. この界隈にも西方からの動きが

関東の弥生時代後期の遺跡で、石斧など石製利器が見つかることはごく稀である。利器がほぼ完全に鉄器となった時代だからで、その鉄器素材はすべて朝鮮半島東南部から入手した。鉄器自体は残りにくいが、実際には膨大な量に達したはずである。鉄器以外を見てみよう。

図7は、西日本に由来する青銅器が弥生時代後期後半に関東地方の各地にもたらされたことを示した。東京湾沿岸では、三遠式銅鐸を原形とした有文小銅鐸や、九州から南関東まで広く流通した無文小銅鐸がかなりの例数に上る。午王山遺跡では銅鐸形土製品3点がA溝から見つかった。銅鐸でも小銅鐸でもないが、何らかの銅鐸祭祀が行われたからこそ土製品が見つかるのである。

日常生活の面でも西方に由来するものとして平地住居を挙げよう（図6）。関東地方の住居は竪穴建物が主であったのが、後期中葉から低地仕様である平地住居が現れる。これは愛知・静岡両県域の低地に立地する集落用に作り上げた住居構造である。武蔵野台地上の遺跡では見られないが、鍛冶谷・新田口遺跡では明瞭である。

午王山遺跡に住んだ人びとは、こうした激動の時代を生きていた。



午王山遺跡第2次調査空撮北西から 昭和56（1981）年

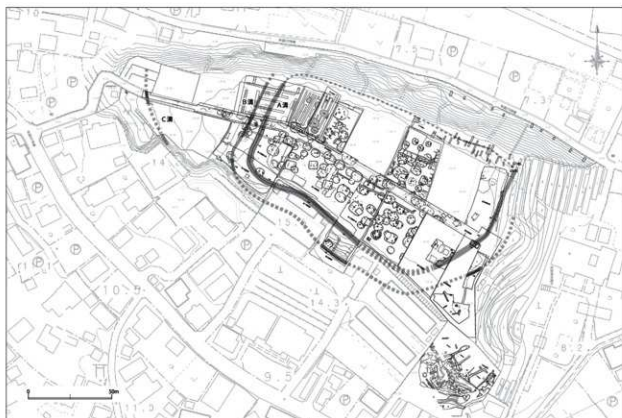


図1 午王山遺跡の全景 独立丘上に住居群が密集し三重の環濠が巡る

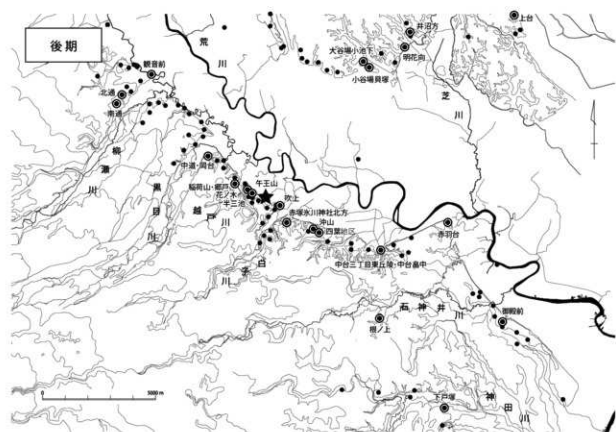


図2 午王山遺跡周辺の遺跡分布 荒川低地に臨む台地上に遺跡が密集する
(●は環濠を持つ遺跡)

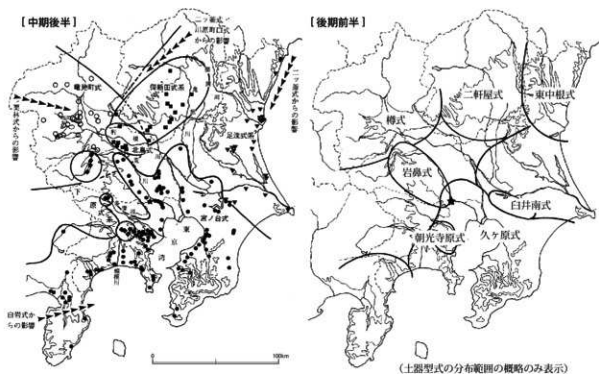


図3 南関東の土器形式分布圏 午王山遺跡は土器分布圏の境界領域にある

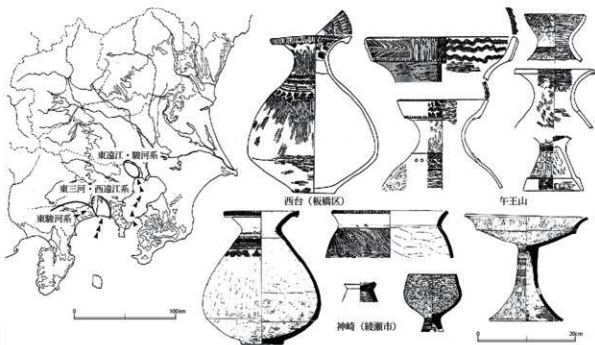


図4 弥生時代後期に東海系土器が南関東に浸透する
上段：東遠江・駿河系、下段：東三河・西遠江系

漢式守光二年の銅鑄、事出不明。使人曰く大宛と稱す。漢風の形相なり。光武、馬を以て印鑑を以てす。安帝の永初元年、漢の國王蘇吉、生口百六十八人を獻じ、贈見を蒙る。

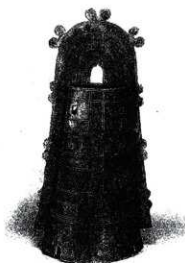


後漢初期の銅鏡が遺尾に 岐阜市瑞龍寺山遺跡 (直径 22.1cm)

(出典)『岐阜市史』史料編

外交：「漢委奴國王」金印と後漢書

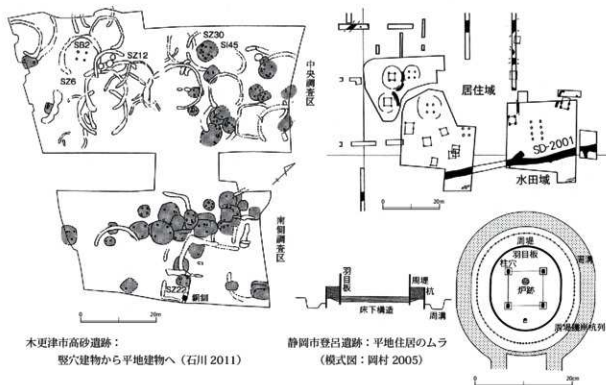
(出典) 磐波文庫(第 401-1)・福岡市博



近畿式C系列 (浜松市才四郎谷遺跡：高 72.4cm) 三連1式 (浜松市前原Ⅷ遺跡：高 68.6cm)

多数あった銅鐸の鑄造組織が二つに集約 (出典) 浜松市博『銅鐸から銅鼓へ』

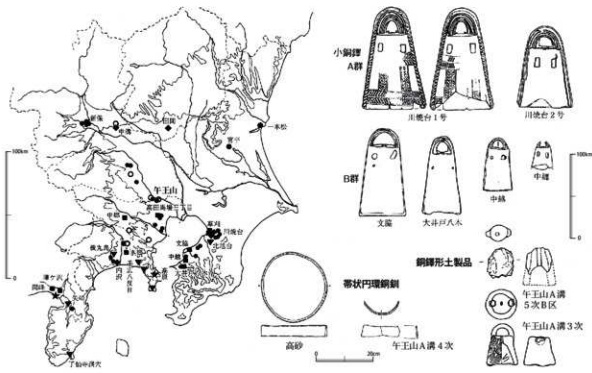
図5 午王山遺跡の時代に西日本方面に起きていたこと



木更津市高砂遺跡：
竪穴建物から平地建物へ (石川 2011)

静岡市登呂遺跡：平地住居のムラ
(模式図：岡村 2005)

図6 低地仕様の住居構造が静岡方面から波及
荒川低地では戸田市鍛冶谷・新田口遺跡が代表例



凡例：◆小銅鐸 A群 ■小銅鐸 B群 ○銅鐸形土製品 ●巴形銅器 ★筒形青銅器 ▼有銜銅劍
●带状円環銅劍

図7 西日本青銅器文化が関東にも波及 宇王山遺跡では銅鐸形土製品

午王山遺跡の弥生土器を読みとく

柿沼幹夫（一般財団法人 さいたま市遺跡調査会）

1 午王山遺跡出土土器群の段階区分

午王山遺跡出土土器群から見た集落形成の段階区分は、次のとおりである。

第1段階 弥生時代中期末 宮ノ台式V期

第2段階 弥生時代後期前葉 岩鼻式土器の南下（岩鼻式2～3期と久ヶ原I式の混成）

第3段階 弥生時代後期中葉 下戸塚式土器の拡散と環濠集落の造営（下戸塚式中期と久ヶ原II式の混成）

下戸塚式土器を継承する弥生町式土器段階（後期後葉）では、集落は廃絶している。

2 岩鼻式土器の南下

弥生時代後期初頭（1世紀）、北武蔵では岩鼻式土器が生成し、白子川流域に局地的に進出している。

岩鼻式土器は中部高地型櫛描土器文化圏の一角を占め、比企・入間地方を中心に分布する。文様は頸部を中心に施され、篠竹を束ねた簾状工具を用い、時計回りに簾状文や波状文を施文する。

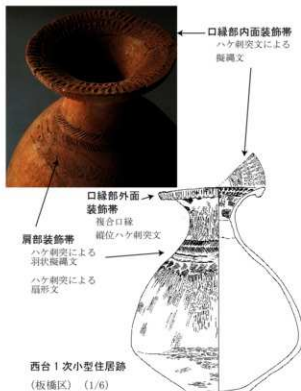


第1図 岩鼻式土器 壺

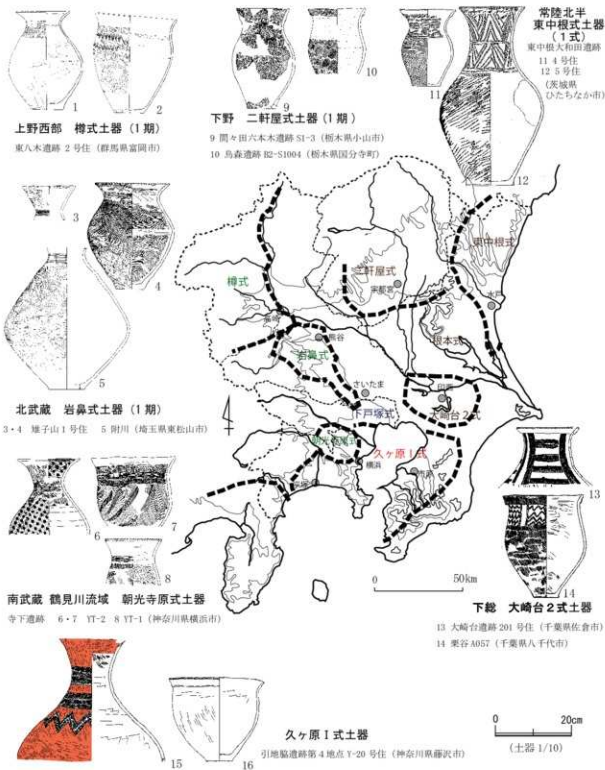
3 環濠集落と下戸塚式土器の時代

弥生時代後期中葉に入る頃（2世紀）、岩鼻式土器を使用する人々は跡形もなく白子川流域から去ってしまう。替って午王山に居を構えるようになるのは下戸塚式土器を使用する人々である。

下戸塚式土器の祖型は、東海地方東部（東遠江）の菊川式土器で、武蔵野台地中央部を刻む神田川流域に遠来した人々がもたらした。新宿区の下戸塚遺跡は彼らの拠点で環濠集落を築いて定着し、やがて武蔵野台地東北縁へ拡散していった。下戸塚式土器は、古・中・新时期に3区分でき、午王山遺跡の集落造営期間は中期から新时期にかけてであった。中期には菊川式系譜のハケ刺突文やハケ目沈線が盛行するが、新时期には端末結節縄文が文様の主体となり、弥生時代後期後葉の弥生町式土器（2世紀後半）へ継承されていった。



第2図 下戸塚式土器 壺の施文構成



第3図 関東地方における土器にみる地域性 弥生時代後期初頭

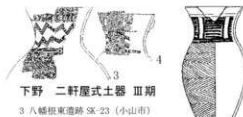
弥生時代中期末から後期初頭(1世紀)にかけては、列島規模で干ばつと洪水が繰り返された。関東は人口希薄な地域になっていたが、関東西部山地沿いの人々は中部高地型櫛描文化圏の周縁地域を形成し、西毛で樽式、北武蔵で岩鼻式、多摩丘陵に朝光寺原式土器が生成された。岩鼻式集団

の一部は白子川流域に南下して、午王山にも居を構えた。東京湾沿岸地域から相模にかけては久ヶ原1式土器が生成されたが、その間隙を縫って武蔵野台地神田川流域には東遠江系の人々が遠来して下戸塚式を生成し、定着拡散させた。



上野西部 樽式土器 3期

1・2 赤坂遺跡 9号住 (群馬県沼田市)



下野 二軒屋式土器 Ⅲ期

3 八幡根東遺跡 SK-23 (小山市)
4 井頭 5区 36号住 (栃木県真岡市)



常陸北半

十王台式土器

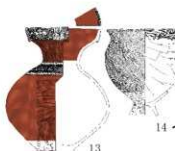
2期
5 上宮瀬富士山
2号住 (常陸大宮市)
6 大畑1号住
(茨城県東茨城郡茨城町)



北武蔵

吉ヶ谷2式土器

16 旧大里村
17・18 船木遺跡 5号方形陶溝墓
(埼玉県秩谷市)



南武蔵北部 弥生町式土器

中里前原北遺跡 13 9号住 14 13号住
(埼玉県さいたま市)



常陸南半から下総

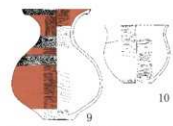
下大津式土器

7 原田北 31号住
8 原田北 33号住
(茨城県土浦市)



南武蔵南部 久ヶ原Ⅲ式土器

二ツ池遺跡 11 23号住 12 16号住 (神奈川県横浜市)



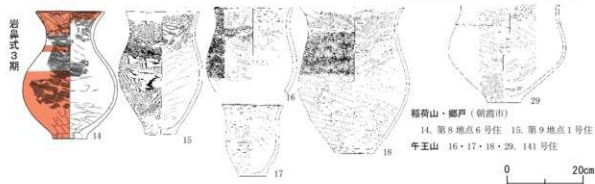
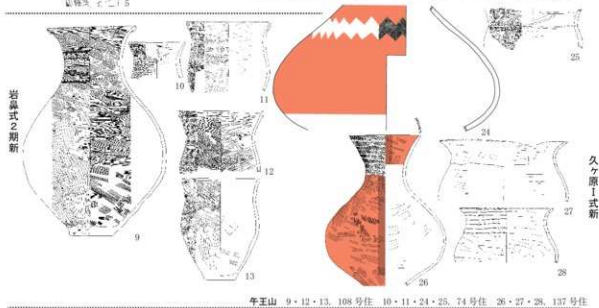
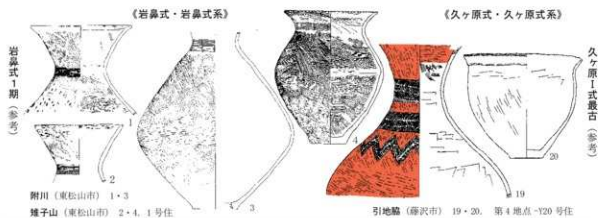
上総 山田橋2式土器

9・10 山田橋大山台遺跡 97号壺穴
(千葉県市原市)

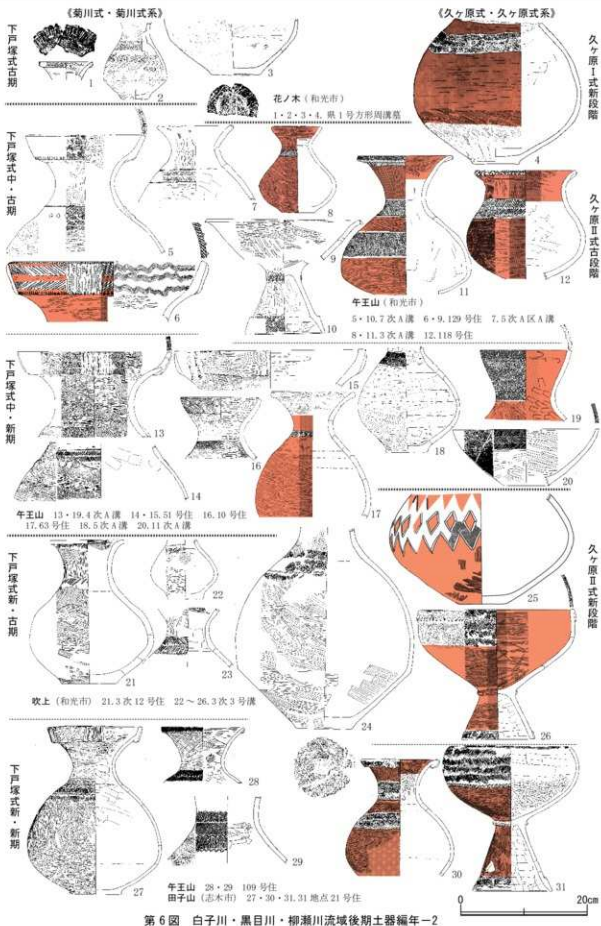
第4図 関東地方における土器にみる地域性 弥生時代後期後葉

下戸塚式土器が定着・拡散し弥生町式土器が生成された後期後葉(2世紀後半)の関東は、土器の地域色が顕著になった時代である。北武蔵では岩鼻式から変容した縄文施文で輪積み装飾の吉ヶ谷式、南武蔵南部では胴部に繁縷に施文する久ヶ原Ⅲ式、上総が久ヶ原式の姉妹型式である山田橋

2式土器である。西毛は樽式3期で、「高崎型」「富岡型」「沼田型」などの地域色の内在が指摘されている。東関東の常陸では、北半部を十王台式が、南半部から下総にかけては下大津式(上稲吉式)が分立した。

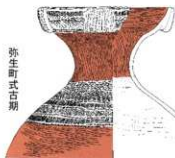


第5図 白子川・黒目川・柳瀬川流域後期土器編年-1

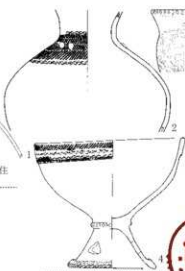


第6図 白子川・黒目川・柳瀬川流域後期土器編年一2

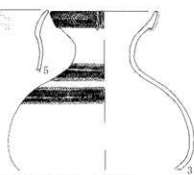
弥生町式古期



西原大塚 (志木市) 1,349号住



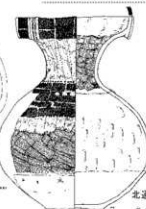
南通 (富士見市) 第3地点 2,105号住
3・5, 255号住 4,250号住



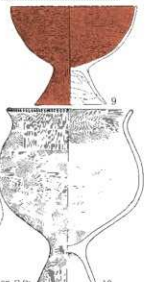
弥生町式新期



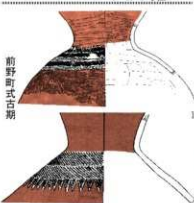
成増西向 (板橋区) 第5地点
6・9, 8号住



北通 (富士見市)
7, 38 地点 61号住 10, 33 地点 67号住
市場峡・市場上 (和光市) 18・19 地点 8, 41号住



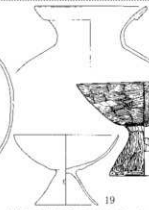
前野町式古期



富士前 (志木市) 15 地点 11・14・16, 1号住
南通 (富士見市) 3地点 12・13, 129号住
市場峡・市場上 (和光市) 24次 15, 80号住



前野町式新期



南通 (富士見市) 3地点 17・18・19・21, 109号住
成増一丁目 (板橋区) 20・22, 2号住

0 20cm

第7図 白子川・黒目川・柳瀬川流域後期土器編年—3

環濠集落午王山遺跡

1 はじめに

午王山遺跡は関東地方における弥生時代後期の環濠集落の好例としてよく知られる存在である。しかし、遺跡内の小区域を対象とした調査が断続的に進んできたこともあって、総括報告書（鈴木ほか 2019）が刊行されるまではその全体像をイメージしづらかった。午王山遺跡が国史跡に指定されたことで遺跡の保護と整備が一層進むことが期待されるが、そのためには午王山遺跡の環濠集落像を再構成して広く共有することが必要であろう。

本発表では、総括報告書の草稿（小倉 2019）から、環濠集落とはどういうものなのか、午王山遺跡の調査によって何がわかってきたのかを簡介し、関東地方を中心とする東日本の環濠集落の特徴にもとづいて午王山遺跡がどのように捉えられるのかに言及することで、その特質や意義に迫ってみることにしたい。

2 環濠集落とは何か

環濠集落は、朝鮮半島を経由して稲作農耕が伝来する際に、ともに伝わってきた集落の形態である。居住範囲を溝で囲って防御力を備えたり、自らの縄張りを示したりするものとみられる。集落のまわりに掘る溝を「環濠」と呼んでいるが、これは集落を全周するものと、全周せずに集落を区画するだけのものがある。特に後者は直線的な区画溝となる場合があって、「条濠」などとも呼ばれる。

環濠は弥生時代のはじめに北部九州にもたらされる。水田をとまなう集落として有名な福岡県板付遺跡も環濠を伴っている。この中には溝の幅や深さがきわめて小さいものも含まれており、板付遺跡の場合には水田に伴う水路が濠の役割を兼ねているとも考えられる。

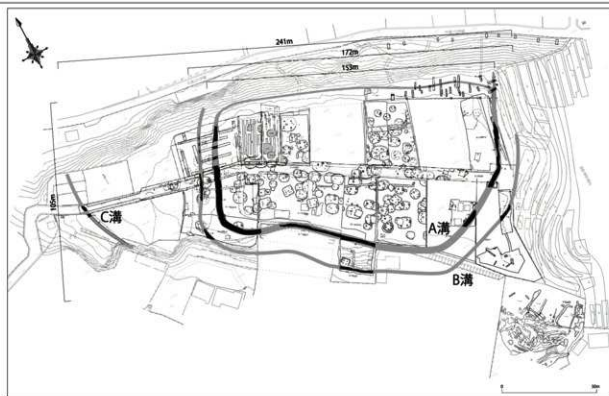
小倉淳一（法政大学文学部）

大型の環濠集落には防御機能が伴う場合もある。佐賀県吉野ヶ里遺跡には大規模な環濠が伴い、防御力の高さが想定される。愛知県朝日遺跡（石黒ほか 1991）では溝のほかに逆茂木や乱杭といった防御施設も確認されており、守りを固めた集落の姿を確認することができる。しかし多くの環濠集落の環濠は形骸化したものであり、防御機能には疑問を呈さざるを得ない。こうした環濠のありかたは弥生時代の早期から認められ、環濠が防御一辺倒のものではなかったことが推測できる。すなわち環濠には、成員の共同作業によって集落の体裁を整え、居住範囲を明確に示すことによってそこに暮らす人々の一体感を高める役割があったとも考えられるのである。この傾向は関東地方において顕著であり、午王山遺跡の環濠集落も同様の意義をもっていただみてよいだろう。

3 午王山遺跡の環濠集落

午王山遺跡の溝

午王山遺跡はすでに一部が削平され、遺跡南部を中心に旧地形が失われているが、これまでの調査成果によると、A溝・B溝・C溝という3条の溝が存在することがわかる（第1図）。A溝は午王山頂部の平坦面を中心に設置され、集落内の多くの竪穴住居を囲繞する環濠である。第2次・第3次・第4次・第5次・第7次・第10次・第11次調査などで検出され、2022年夏には遺跡北側のトレンチ調査において溝の続きが確認された。A溝の外側に、一見してA溝と並行するように掘削されたようにみえる比較的規模の小さな溝がB溝である。第2次・第3次・第4次・第5次・第10次調査において検出されており、現地踏査による地形確認の結果、この溝は集落全体を囲繞するものではなく、遺跡北端の崖で途切れるものとみられる。A溝・B溝の間隔はA溝西側



第1図 午王山遺跡の環濠と条濠（A溝・B溝・C溝）

において最も狭く7m程度、第3次調査区や第10次調査区においては12m程度となる。これらとは別に、傾斜を強めながら下っていく午王山の西端部を東西に区画するように配されている南北方向の溝がC溝であり、第2次・第13次調査区から検出されている。この溝は南部の崖面において断面が確認されており、等高線に沿いながら弧を描くように設置されたものとみられ、いわゆる「条濠」であろう。

環濠の時期

午王山遺跡では、A溝においてその中層・上層を中心に土器の出土が顕著であり、B溝では出土遺物は少なく、C溝においてはほとんど遺物が認められない。

柿沼幹夫の成果（柿沼2019）によれば、午王山遺跡は弥生時代中期後葉から後期前半までの集落遺跡であり、その主体は後期中葉前後にある。また、環濠は東京湾岸の土器型式では後期前半の久ヶ原Ⅱ式期古段階（南武蔵北部における下戸塚式中・古期）に掘削されるものとみられる。その後、B溝の上に第2次25号住居址、第5次B区68号住居址の2棟が構築されており、溝の一

部はこの時期にすでに埋没していたとも想定できる。続く久ヶ原Ⅱ式期新段階（下戸塚式中・新期）になると、埋没したB溝の上に北から第2次30号住居址、第4次52号住居址が構築されている。さらにA溝上には第4次50号住居址、51号住居址が構築される。同じ久ヶ原Ⅱ式新段階でも後半期に属する下戸塚式新・古期にはB溝上に第5次B区62号住居址が構築される。

このように出土土器と遺構の重複関係とにもとづく集落の変遷過程からは、午王山遺跡の環濠が掘削されてから埋没するまでの時期が久ヶ原Ⅱ式期の中に収まること、掘削後にあまり時間をおかずに溝の一部が埋没し、そこに竪穴住居が営まれることが想定できる。なお、C溝については出土資料が僅少であり、時期を特定することができない。

多重環濠とその規模

これまでの調査成果からは、午王山遺跡の環濠は、地形上の最高所と傾斜の変化を意識しながら配置されていることがわかる。A溝は標高25mにおよぶ午王山最頂部を取り囲むように掘削され、その周囲のやや標高の低い部分にA溝を取り巻

くようにB溝が掘削される。B溝とC溝との間隔は第2次調査区で約60mを測り、C溝はある時期の集落域の西端部を区画するかのように見える。A溝とB溝は溝相互の配置関係による限りA溝の存在を意識しながらB溝を掘削したものと考える方が自然であり、少なくともある時点ではA溝・B溝ともに機能していたと考えるのが妥当であろう。遺構・遺物および環濠の配置を検討することによって、午王山遺跡には二重環濠の時期があったものと推定できるのである。

環濠の規模については、A溝では長軸約153m、短軸約93mを想定できる。B溝の長軸は172mとなり、一回り大きな範囲を区画する。A溝の周長は約419m、区画された範囲の面積は約11,589㎡と算出できる。B溝は全周しないことが前提ではあるが、A溝の範囲も含めて14,000㎡程度の規模となると考えてよいだろう。これらの溝は午王山の頂部を囲み、集落の「縄張り」を明確化したものとも考えられよう。

なお、A溝の掘削土量を簡易的に推計すると921.8㎡、B溝では136.3㎡となる。B溝の規模はA溝に比べてきわめて小さいこともわかる。2条の溝の掘削土量を合計すると1,050㎡を超えることになる。

環濠の付帯施設

環濠の設営に関してたびたび問題となるのは排土の処理と土塁や木柵などの付帯施設のことである。午王山遺跡では目立った遺構は発見されておらず、今のところこれら施設の存在を積極的に想定・評価することはできそうにない。多重環濠という前提に立てば、一般に外側と内側の環濠の間、あるいは内環濠の内側に土塁が設けられることなどを想定できることもある。午王山遺跡の場合、環濠掘削当初の堅穴住居址はA溝から内側におおよそ5m以上離れて構築されており、空間的な規制の存在したほかに、排土を簡単に盛ったなどの可能性は残されるが、溝間の距離は厳密には揃っていないため、土塁を前提とした溝の構築がなされたのかどうか判断としない。

集落域と墓域

午王山遺跡では第1次調査区と第10次調査区から方形周溝墓の検出をみており、環濠外に墓域を囲む集落構成であることも確認できる。方形周溝墓は四隅の切れる形態的に古いタイプのもので全周するものが存在するようであり、両者の間には時間差が想定できよう。前者は中期に多いものであるため、宮ノ台式期の集落に伴う可能性がある。これらが集落到近い場所に造営されていることは、午王山の頂部に形成された該期の集落の規模に照らしても妥当である。ただし墓に伴う遺物は少なく、土器から時期を追うことは困難であった。第1次調査区の方形周溝墓には環濠の時期に伴うものがあることも想定される。墓域は本来さらに広がっていたことであろうが、削平を受けて現存していない部分も多い。

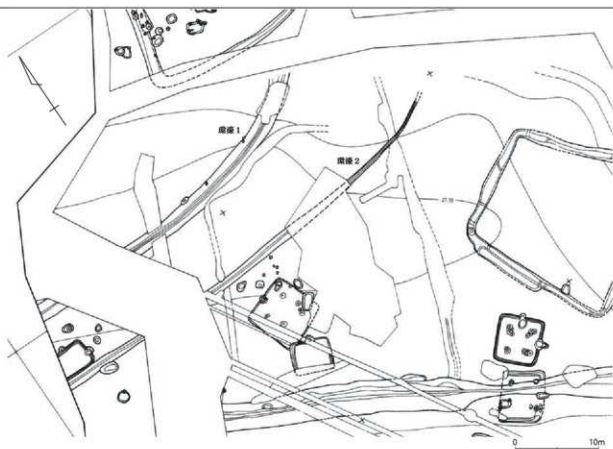
4 東日本の環濠集落と午王山遺跡

全体像のわかる環濠

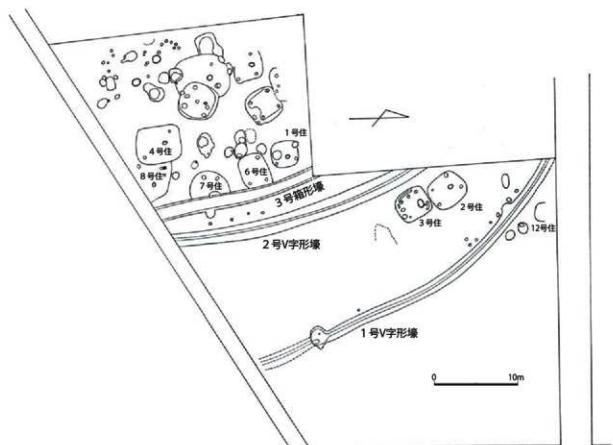
東日本の環濠集落には巨大なものは少なく、関東地方においては環濠に囲まれる面積がおおよそ30,000㎡までにとどまるものがほとんどである。一方、関東地方では遺跡の発掘例が多く、弥生時代を中心として溝を持つ集落の発見・調査例は200以上にのぼっている。その中でも環濠の全体像を推定できるものは現在のところ30例程度に限られており、午王山遺跡もその一例に加えられる。

環濠集落の登場と展開

関東地方の集落到環濠が登場するのは弥生時代中期後葉の宮ノ台式期になってからである。これはその直前の時期に東海地方からの影響を大きく受けて水稲農耕が本格化したことに直接の原因があるものとみられる。宮ノ台式土器は静岡県域の白岩式土器との関係が深い土器である。横浜市の鶴見川・早淵川流域では全面的に発掘された大塚・歳勝土遺跡（武井編1991、坂上・坂本編1975）をはじめとする弥生時代中期後葉の環濠集落が流域に点在する様子が判明しており、列島における弥生社会の内実を検討するための格好



第2図 花ノ木遺跡で検出された溝（新屋ほか 1994 を改変）



第3図 中里前原遺跡で検出された溝（秦野ほか 1980 を改変）

の素材を提供している。この時期に東京湾岸を中心とする南関東各地で環濠の形成が始まるものとみられ、千葉県域の養老川流域に属する市原台地、鹿島川が注ぎ込む伊藤沼南岸域などでも典型的な環濠集落が形成される。ただし、中期末になると上総地域の一部を除いて多くの集落が一旦廃絶するようである。

後期になると再び集落が増加するとともに、環濠の造営も再開されるが、中期段階の環濠に比して、後期以降の環濠は面積および掘削土量の面で総じて小型化する。午王山遺跡の環濠が営まれるのは後期前半と考えられ、後期後半から古墳時代初頭にかけてはさらに小型化する集落と比較的大型の集落とに分化して多様化するものとみられるが、やがて消滅する。

これら環濠集落の立地は、関東地方では沖積地との比高差のある台地上にあるとみられていたが、その後沖積地に所在する集落の事例も認められるようになり、立地の多様性を強調する意見もある(浜田 2019)。

また、中部地方以東にみられる環濠集落のうち太平洋側に所在するものは千葉県域までにほぼ限定され、利根川を境として以東・以北にはほとんど分布しない。これは方形周溝墓を伴う集落遺跡の分布とも重なり、弥生文化の地域性を示す現象の一端とみられるものである。環濠の分布には、東海地方からの文化的影響を蒙りながらも、既存の文化要素を組み替えて対応していった関東地方の集団による主体的な適応の様子が示されているとみるべきであろう。

午王山環濠の特質と意義

午王山遺跡は弥生時代後期前半期に属する多重環濠集落遺跡とみられる。先述の通り、環濠で囲まれた面積はおよそ 14,000㎡となり、午王山遺跡の環濠は面積の点からは関東地方の弥生時代の環濠全体の中では比較的小型の部類に属することになる。しかしそれは中期の環濠集落を含めた理解であり、後期の環濠集落の平均面積(約 7,900㎡と想定)を上回っており、後期としては大型の部類に入る。そして残存率が高く調査による情報

量の多い良好な環濠集落遺跡といえよう。

また、午王山遺跡の立地は荒川低地を見下ろす独立丘上にあり、特異な様相を示している。丘の上を占めた集団が最高所をめぐる環濠を設置してその場所に継続的に居住した事例と考えられよう。環濠の断面幅や深さから実用的な機能について積極的な評価はできないが、後期としてはしっかり作られた環濠であるといえるのである。

さらに午王山遺跡の大きな特徴は、多重環濠にある。多重環濠そのものは九州地方をはじめとして多数確認されており、列島に伝来した環濠の情報に本来的に伴う要素のひとつとみられるが、関東地方ではあまり注目されてこなかった。その理由は明らかで、全貌の推定できる遺跡の中に、多重環濠とされるものがこれまでほとんど存在しなかったためである。多重環濠集落は弥生時代後期の関東地方に特徴的な事例とは言い難いため、午王山例が二重の環濠であるとすれば全体像を推定できる貴重な事例となる。埼玉県域においては和光市花ノ木遺跡(新屋ほか 1994)、さいたま市中里前原遺跡(秦野ほか 1980)で複数の環濠をもつ集落遺跡の報告があるものの、いずれも部分的な検出であり、環濠集落の全体像は判明していない。これらに比して午王山遺跡は全体像が想定可能で、なおかつ集落の変遷も追うことができる点においては、きわめてすぐれた情報を得ることができる遺跡であることがわかる。

さて、このように関東地方においては特異な存在といえる午王山遺跡であるが、環濠内の集落の様子は弥生時代後期における一般的な環濠集落と大きな違いはなさそうである。関東地方の中期の環濠集落では環濠内に竪穴住居が密集するように分布し、倉庫とみられる建物も認められる例がある。また、一般的な竪穴住居よりもかなり大型の住居が内部に含まれることもあり、大型方形周溝墓が単独または少数、集落内に営まれる例も見受けられる。後期においても多数の竪穴住居が残される傾向はあり、大型の竪穴住居も存在するが、特殊な方形周溝墓などは顕著ではない。午王山遺跡も大小の竪穴住居が高い密度で分布

するものであり、関東地方の環濠集落内部の基本的なありかたから逸脱するような性格はもっていない。

一方、東海地方においては静岡県伊場遺跡（鈴木⁶⁶ほか 2008）のように、一般的な集落から脱した姿をみせる多重環濠集落もある。同遺跡は同時期の大規模な環濠集落である梶子遺跡（井口⁶⁷ほか 2017）に隣接しているものの、掘立柱建物や周堤を持つ平地式の住居址によって構成されるなど、首長の居館としての性格を持ち合わせているようである（寺沢 1998）。

こうしてみると、比較的等質な居住施設を多数配置する午玉山集落が独立丘状の台地に占地して多重環濠を掘るという状態は、後期集落として独特のあり方を示しているといえるだろう。中期以来の環濠集落内の住居配置を形態的に維持しつつ、関東地方には少ない多重環濠を設置することは、午玉山における集落の一般性と特異性の両面をあらわしているように見受けられる。こうした点でも集落の全体像を推定復元することができる午玉山遺跡は、東日本の弥生時代社会全体を検討する上で重要な事例といえるだろう。

5 おわりに

以上のように、弥生時代の環濠についての知見をもとにして、午玉山遺跡における環濠の全体像と関東地方を中心とする東日本の環濠集落からみたその特質や意義について述べてみた。環濠集落には当時の社会関係が投影されていることは間違いないが、特に荒川流域の弥生時代後期社会をより深く検討していくために、環濠集落の解明は不可欠である。

今回、午玉山遺跡が関東地方における弥生時代後期の環濠集落としては比較的大型であり、環濠そのものもよく掘り込まれていることが明らかとなった。また、類例の少ない多重環濠集落として復元することが可能であり、独立丘に立地するといった特異性を有することも想定できた。こうした特性は弥生時代後期の関東地方の社会を考察するために有効な視点を提供するものと考えられる。

今後は、午玉山遺跡の環濠の姿をより鮮明にして集落内部の検討を進めるとともに、午玉山遺跡を核とした荒川流域の後期集落遺跡の諸関係を検討し、その変遷過程に一定の見通しを立てることが求められよう。すでに関東地方においては中期の集落群に関する議論が深まりつつある。河川と可耕地の規模において鶴見川流域の社会を超えるスケールをもつこの地域で集落の動態を明らかにすることによって、集落研究にさらに豊かな知見を加えることができるものとみられる。史跡整備に伴う調査成果にさらに期待したい。

<引用・参考文献>

- 井口智博ほか 2017『梶子遺跡 18 次』浜松市教育委員会
石黒立人ほか 1991『朝日遺跡 1』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 30 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
小倉淳一 2019「第 2 節 東日本の環濠集落からみた午玉山遺跡」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第 66 集 和光市教育委員会
柿沼幹夫 2019「第 3 節 午玉山遺跡出土土器の編年的位置づけ」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第 66 集 和光市教育委員会
坂上克弘・坂本 彰編 1975『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 V 歳勝土遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
鈴木一郎ほか 2019『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第 66 集 和光市教育委員会
鈴木敏則 2008「第 5 章 時代別総括 第 1 節 弥生時代」『伊場遺跡総括編（文字資料、時代別総括）』浜松市教育委員会
武井剛道編 1991『大家遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X II 横浜市埋蔵文化財センター
寺沢 董 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
新屋雅明ほか 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 134 集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
秦野昌明ほか 1980『中里前原遺跡 一第 1 次発掘調査報告書一』埼玉県与野市中里前原遺跡調査会
浜田晋介 2019「弥生時代の水稲単作史観を考える」『日本考古学』第 48 号

午王山遺跡と弥生時代の祭祀について

鈴木敏弘 (和光市文化財保護委員会)



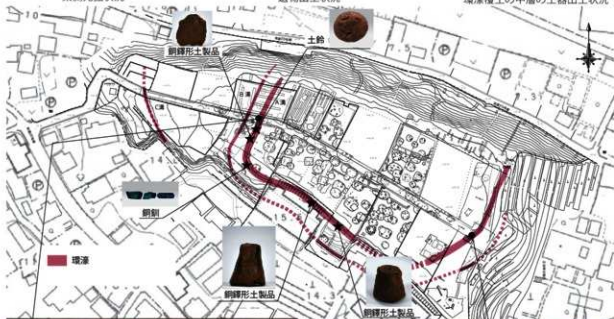
2次調査A溝 (旧1溝)
東側完壁状況



2次調査A溝 (旧1溝)
遺物出土状況



2次調査A溝 (旧1溝)
環濠覆土の中層の土器出土状況



2次調査A溝 (旧2溝)
環濠覆土の中層の土器出土状況



2次調査A溝 (旧1溝)
環濠覆土の中層の土器出土状況



7次調査A溝完掘状況
手前の測量杭付近で銅鐸形土製品出土



7次調査A溝 銅鐸形土製品出土状況
環濠覆土中から出土



7次調査A溝 遺物出土状況
環濠覆土中からまとめて出土



3次調査銅鐸形土製品
舞部(上部)に紐の刺痕跡
が確認できる

7次調査銅鐸形土製品
側面に紐の一部が残存し、紐刺
痕跡も確認できる

5次調査銅鐸形土製品
下部欠損。側面に紐を覆した粘
土紐が貼り付けられている。



朝霞市向山遺跡出土銅鐸形土製品
(写真提供：朝霞市教育委員会)
太極の形で、下部断面は梨形である。舞
部と舞身の境をハケ刺突沈線で表している。
舞面は全体的に1/4径割製法で削られている。

午王山遺跡のイネ・アワ・キビ

—和光市周辺での農耕のはじまり—

遠藤英子（明治大学黒耀石研究センター）

たわわに実った稲穂が秋風に揺れる景色は日本の原風景だが、このような景色がいつ頃始まったのか、本発表では穀物のタネから検討してみたい。

考古学でタネを追いかけるには二つの課題がある。まずタネはとても小さいので発掘ではなかなか見つけれないし、見つかったとしても小さいのでタネが何の種子であるか同定が難しい。またタネの帰属時期を決めるのもう一つの課題で、小さなタネは遺跡の古い時代の土壌に混入してしまう可能性がある。

この種子同定と時期比定という難題を克服できる手法として近年注目されているのがレプリカ法である。土器表面を丁寧に観察するとタネが残したと思われる穴が見つかることがある。この穴にシリコンを充填して型取りし、それを顕微鏡で観察して種子同定を行うのがレプリカ法の手順で、土器の中のタネはすでになくなっていくが、タネが土器の壁面に残した表面状態は驚くほど鮮明に残されており確実性の高い種子同定が期待できる。また圧痕が見つかった土器の型式をもとにタネの時期も推定が可能となる。今日このレプリカ法によって縄文時代のマメやシソなど多様な植物利用や、弥生時代の日本列島各地への農耕の広がりに



圧痕からシリコン製レプリカの取出し

ついて様々な研究が行われている。今回はこのレプリカ法で得られたデータを用いて、縄文時代晩期末に日本列島に伝播したイネや雑穀（アワとキビ）がいつ頃どのように午王山遺跡まで辿り着き、実際にどのような栽培が行われていたのかを検討してみたい。

実は、土器圧痕から農耕を探る研究はすでに百年前から始まっていた。大正14年に山内清男博士は、宮城県の樹形圃（ますがたかこい）貝塚出土の土器の底部にイネの圧痕を発見し、この土器の使われた時代にすでに稲作が始まっていたと推定している(1)。ただ土器の圧痕を肉眼や虫眼鏡で観察して種子同定する方法は正確性を欠くため



樹形圃貝塚出土土器底部のイネ圧痕



15x 665µm #0.27 1mm 14x 2012/10/29 15:57 11.8



その後あまり普及しなかった。それが再注目されたのが今日盛んに行われているレプリカ法である。手順はとてもシンプルで、タネが残したらしい穴（圧痕）が見つかったら、そこに歯科医が使うシリコンを充填し、硬くなったら取り出して、その型取りしたレプリカを顕微鏡で観察、同定する。あのザラザラした土器からは想像しづらいが、土器の胎土はタネの形や表面を鮮明にコピーしており、状態の良い資料なら500倍の顕微鏡観察も可能である。

このレプリカを焦点深度の深い走査型電子顕微鏡（SEM）で観察すると、イネばかりでなくその半分ほどのサイズのアワやキビまで正確な種子同定が可能となる。イネはお馴染みの紡錘形をしており、稈には顆粒状突起と呼ばれる突起列が並んでいる。またアワの内外穎には乳頭状突起が観察され、一方キビはアワよりやや大きめでツツと尖り表面は平滑である。このように鮮明なSEM画像からは、確実性の高い種子同定が期待できるのだ。

では、このような穀物はいつ頃日本列島のどこのあたりに伝播したのだろうか。現状で列島最古のイネは、レプリカ法により鳥根県板屋Ⅲ遺跡出土の縄文晩期後半の土器から見つかったイネ圧痕である(2)。この土器は2800-2700BP頃の地方に分布した前池式と呼ばれる土器なので、その土器から見つかったイネも同じ時期のイネと推定できる。同じ頃、福岡県の江辻遺跡では同じくレプリカ法でアワも同定されており、日本列島にはイ

ネと雑穀がセットとなって到着した可能性が高い。佐賀県の菜畑遺跡からは炭化イネや炭化アワも報告されているが(3)、土器圧痕からもイネとアワを同定している。



また佐賀県の宇木汲田（うきくんでん）遺跡からも炭化イネが検出されており、炭素年代測定結果から「おおむね、紀元前9世紀後半から紀元

前 8 世紀初めのイネ」と推定されている (4)。以上のような穀物資料から見ると、板屋Ⅲ遺跡を除いてほとんどが北部九州にまとまっており、日本列島への農耕の伝播は紀元前 9 世紀後半から紀

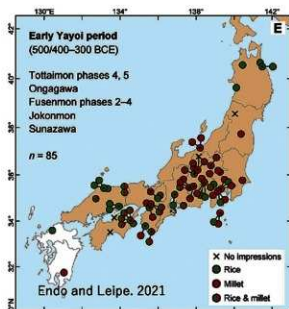


元前 8 世紀初め頃、北部九州に到着した可能性が高く、その穀物パッケージはイネ、アワ、キビのセットだったと推定できる。

ここ 20 年ほど列島各地でこのレプリカ法が実施され、北部九州への到着以降の農耕の拡散が列島規模で検討できるようになってきている。前述した早い時期の穀物圧痕は突帯文土器と呼ばれる、西日本の縄文晩期最後の土器から見ついている。そして突帯文土器以前の縄文晩期の土器からはまだ穀物は検出されていない。それが突帯文土器の出現とともにわずかに穀物圧痕が見つかるようになり、そのフェーズが進むとともに同定数は増加し、東に向かって伸びていく。そして縄文晩期末 / 弥生時代早期 (突帯文 2・3 段階) には穀物情報は中央高地から伊豆七島を結ぶラインぐらまで拡散したようである。また西日本ではイネが主体となる傾向が看取されるが、対照的に東日本では雑穀がほとんどで、どうやら関東地方を含めた東日本では農耕受容当初、まずはイネではなく雑穀を選択したと思われる。

弥生時代前期のレプリカ調査データを地図に落としてみると、西日本では緑のシンボルで示したイネが中心もしくはイネと雑穀がセットの傾向が

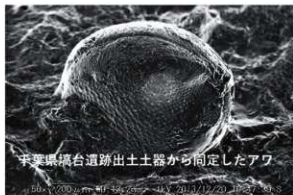
読み取れ、一方東日本では赤いシンボルの雑穀が優勢のようである。また弥生時代前期には東北北部まで穀物が到着しており、しかもその穀物がイネに限定されていることは興味深い。



Endo and Leipe, 2021.(5) より転載

そんな中で、水田も石包丁もなかなか見つからない関東地方は水田稲作の開始が本州島の中でも極めて遅い地域と考えられてきたが、実は弥生前期には穀物情報は到着していたようだ。

千葉県の塚台 (はなわだい) 遺跡出土の水Ⅰ式 (古) 土器 (2600-2500BP 頃) や、群馬県三ノ倉落合遺跡の同じく水Ⅰ式 (古) 土器からアワを同定している。





ただこの時期の関東地方の遺跡から同定できた穀物は僅かで、農耕がしっかり定着した段階ではなく、あくまでも穀物栽培情報が到着していた時期と捉えるべきだろう。

ただ弥生時代前期末頃になると、神奈川県中屋敷遺跡の土坑からは炭化イネ、アワ、キビが多量に検出され(6)、南関東ではいよいよ穀物栽培が開始されたと思われる。またその頃東日本の代表的な墓制であった再葬墓(さいそうぼ)の出土土器からも多くの雑穀が同定されるようになる。しかも弥生時代前期の再葬墓からは雑穀ばかりが同定されたが、中期に入るとイネもその組成に加わる。

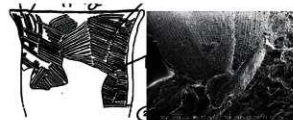


さて、弥生時代中期中頃になると、いよいよ埼玉県下にも農耕集落が出現する。

熊谷市の妻沼低地に立地した池上・小敷田遺跡では大量の穀物圧痕が検出され、ひとつの土器からイネと雑穀が同時に見つかることも多い。



池上遺跡出土土器の圧痕と同定したイネ



小敷田遺跡出土土器と同定したイネ

そして中期後半になると荒川中流域の妻沼低地には北鳥遺跡、前中西遺跡など本格的な農耕集落が出現する。北鳥遺跡では、人工の河川に木製の骨組みで補強した堰を構築し、その規模は長さ7m、高さ1m以上もある。

また前中西遺跡ではそれまでの再葬墓による墓制から、近畿地方で出現したとされる方形周溝墓という墓制に変化している。



熊谷市史通史編上巻 2018 より転載

そしてようやく荒川下流域の和光市周辺でもこの頃、農耕が始まったようだ。お隣の朝霞市では弥生時代中期後半の、宮ノ台式土器を使う向山遺跡で、東日本では類例のない鉄斧が出土している。中でも木材の伐採に使用されたと思われる二条凸帯鋳造鉄斧は、大陸で作られるばる運ばれたと考えられる。



2022年の奈良市博物館企画展ポスター

また志木市のやはり宮ノ台式土器を出土する城山遺跡でも、挟入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁など、いわゆる大陸系磨製石器がセットで出土している。



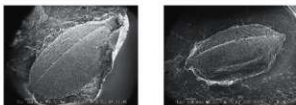
そして興味深いことに両遺跡のレプリカ法調査ではイネばかりが同定され、雑穀は見つかっていない。両遺跡も含めて南関東中心の宮ノ台式土器を使うグループの遺跡ではイネ中心の傾向が見られる一方、関東北西部中心の北島式のグループではイネと雑穀が両方同定される傾向がある。

さてようやく本日の本題である午王山遺跡に辿り着いた。その午王山遺跡の特徴の一つは、中央高地系の岩鼻式土器文化と南関東系の久ヶ原式や東海東部系の下戸塚式土器文化の交差点である事だ。遺跡は宮ノ台式土器の時代から始まっている

が、レプリカ法調査では、宮ノ台式らしき土器からイネ1点が同定されただけで、その土器が底部だけで器形や文様が不明なため、確実に宮ノ台式とは認定できなかった。ただその次の後期前半になると、午王山遺跡では久ヶ原式や下戸塚式土器を介して太平洋沿岸を東上してきた稲作中心の農耕情報と、中央高地経由のイネと雑穀が複合した農耕情報が交差した遺跡ではないかと筆者は捉えている。土器圧痕からも岩鼻式土器からはイネ2点、アワ2点、キビ5点が同定され、久ヶ原式からはイネのみ7点、下戸塚式からはイネ19点、アワ2点、キビ1点を同定した。

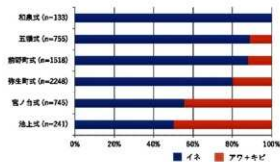


↑岩鼻式小型壺から同定したキビとアワ



↑久ヶ原式(左) 下戸塚式土器(右) から同定したイネ

なお観察土器点数は下戸塚式が全体の90%以上と突出しているため、単純な同定数の比較は難しい。ただ弥生時代中期から古墳時代の妻沼低地と大宮台地でのレプリカ法調査結果(調査遺跡数65)からは栽培穀物が時間の経過とともにイネに集中する傾向が見られる(7)。



弥生時代後期以降には、それまでわずかであった炭化穀物の報告が増加し生産量が増加したと予測される。和光市市場峡・市場上遺跡の後期住居（クヌギ節炭化材の年代測定から2世紀前半から3世紀前半）から出土した台付裏や周辺の焼土からは、1万粒以上の炭化米が同定されている（8）。



和光市市場峡・市場上遺跡出土炭化イネ

一方、志木市田子山遺跡の後期住居からは炭化イネ 81,481点、炭化アワ 1,924,993点と大量の穀物が同定され、その年代測定結果はほぼ市場峡・市場上遺跡と並行期である（9）。従って弥生時代後期荒川下流域の栽培穀物が稲作に集中していたのか、イネと雑穀の複合的栽培だったのか、それとも近隣の遺跡間でも多様性があったのかは、未だ不明である。今後資料を蓄積して検討していく必要があるだろう。



志木市田子山遺跡弥生時代後期住居出土炭化イネと炭化アワ

後期初頭の空白期を挟んで、弥生時代中期後半から後期後半まで継続した午王山遺跡は、弥生時代のうちに終焉を迎える。そして古墳時代が始まる。鉄製農具の普及は生産性を大きく向上させ、新しい道具を携えた人々はそれまで難しかった荒川など大河川低地部にも進出して新たな水田を開発していったようだ。わたしたちが見慣れた、たわわな稲穂が揺れる水田風景は、この頃始まったのかもしれない。

<引用文献>

- (1)「石器時代にも稲あり」山内清男 1925『人類学雑誌』40巻5号
- (2)「レブリカ法による山陰地方縄文時代晩期土器の糊状圧痕の観察」中沢道彦・丑野毅 2009『まなぶ』2
- (3)「菜畑遺跡の埋蔵種実の分析・同定研究—古代農耕と植生の復元—」笠原安夫 1982『菜畑 分析・考察編』唐津市
- (4)「弥生時代開始期の実年代再論」宮本一夫 2018『考古学雑誌』100-2
- (5)E.Endo, C. Leipe. 2021. The onset, dispersal and crop preferences of early agriculture in the Japanese archipelago as derived from seed impressions in pottery. *Quaternary International*, 623. 35-49.
- (6)「土坑から出土した炭化種実同定」新山雅広 2008『中層遺跡発掘調査報告書』昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科中層遺跡発掘調査団
- (7)「弥生時代から古墳時代前・中期の穀物栽培」柿沼幹夫・遠藤英子 2021『さいたま市アーカイブスセンター紀要』5号 さいたま市
- (8)「市場峡・市場上遺跡（第18次・第19次調査）和光市遺跡調査会、和光市教育委員会 2013
- (9)「埼玉県志木市田子山遺跡第31地点弥生時代21号住居跡出土炭化種子の分析」高瀬克範・遠藤英子 2010『古代学研究紀要』12号 3-13 明治大学古代学研究所



国史跡指定記念 午王山遺跡展
～独立丘に営まれた弥生時代の環濠集落～

発 行 令和5（2023）年10月5日
編集・発行 和光市教育委員会（担当：生涯学習課）
〒351-0192 埼玉県和光市広沢1-5
電話 048-464-1111
印 刷 関東図書株式会社

『国史跡指定記念午王山遺跡展 ～独立丘に営まれた弥生時代の環濠集落～』
正誤表

頁	箇所	誤	正
表紙裏	例言 9 11 行目	笹森紀美子	笹森紀己子
3	写真キャプション 午王山遺跡空中写真	(昭和 55 年撮影)	(昭和 56 年撮影)
9	下から 13 行目	・・・北西から南東報告に・・・	・・・北西から南東方向に・・・
33	左段下から 3 行目	その後、B 溝の上に第 2 次 25 号住居址、第 5 次 B 区 68 号住居址の 2 棟が構築されており、溝の一部はこの時期にすでに埋没していたとも想定できる。	削除

(令和 6 年 3 月 5 日版)